

共通教育における情報リテラシー教育の意義と課題

大阪大学
田中規久雄

はじめに

大学設置基準（文科省令、平成21年11月11日最終改正）19条2項は、「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。」と規定している（下線筆者）。

ここでは、学生の所属学部学科に関わらず必要な、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培う」ことを主たる目的とする科目等の教育活動を「共通教育」と呼び（大阪大学における呼称、新潟大学で言う01、02、03科目、資料1参照）、そこにおける情報リテラシー教育の意義について検討する。

1. 大阪大学における「共通教育」

大阪大学においては「全学共通教育」として、「共通教育系科目」と「専門教育系科目」を提供しているが、後者は厳密には「専門教育」に該当するので、前者について検討する（資料2参照）。

大阪大学では、平成3年7月の大綱化以前の大学設置基準19条の、「大学で開設すべき授業科目は、その内容により、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、及び専門科目に分ける。」という枠組みを継承しつつ改革が行われた。何度かの手直しがあったが、現在は以下のような状態である。

- (1) 教養教育科目：旧設置基準時代の「一般教育科目」にあたるが、それに多くみられた、「人文、社会、自然」等の分野別ではなく、「基礎教養、現代教養、国際教養、先端教養」という目的別、機能別の分類が行われている。
- (2) 言語・情報教育科目：内容の改善はともかく、言語系は形式的にはほぼ旧設置基準時代と同様である。ただし、ここに「情報教育科目」が新規参入している点特徴的である。
- (3) 基礎セミナー：旧設置基準下においては、一般教育科目のアドバンスドコースとして2年次に置かれていた様な少人数のセミナー形式の授業が、大綱化以降はむしろ1年次向けのものとしてスピニングアウトした。（アドバンスドなセミナーは事実上各学部の専門教育に委ねられた。）
- (4) 健康・スポーツ教育科目：言語系と同様、内容は

ともかく、形式はそれほど変わっていない。

卒業必修単位数については、学部毎に異なるが、「教養教育科目」については概ね8～16単位、「言語系科目」については概ね9～16単位、「情報教育科目」については2～4単位（例外的に法学部のみ選択必修）、「健康・スポーツ教育科目」については2単位が必修となっている。

現行でも大綱化以前の大学設置基準でも、学部の卒業必要単位は基本的に124単位（32条、4年制以外は異なる）となっているが、大綱化以前は、「一般教育科目36単位」、「外国語科目8単位」、「保健体育科目4単位」、計48単位以上が学部卒業の為の教養科目の基礎要件とされていた。しかし、設置基準に置けるその縛りが外れた現状の大阪大学では「専門教育系科目」を除けば、旧教養系の科目の必修単位数は26～40単位、平均約32単位である¹。

新潟大学では全学共通で30単位とされているが、例えば法学部を見ると、必修科目のリーガルスタディⅠ・Ⅱを大阪大学の「専門基礎教育科目」にあたるものと看做すと、言語系6単位、一般科目20単位の計26単位となり、大阪大学よりやや少ない。

2. 情報リテラシー教育の位置

さて、こうした教養教育改革の流れの中で、所謂「情報教育」が位置づけられたのではあるが、情報教育は、「情報科学」や「情報学」入門ではなく、あくまで「外国語」や「保健体育」と同様なスキル科目として位置づけられた²。

つまり、「情報科学」や「情報学」の入門教養科目は旧大学設置基準でいう「一般教育科目」として開講すればよいのであって、ある意味一般講義室での講義でもよいわけである。

この点は非常に重要な点であって、教養教育における情報教育は、スキルのための実技科目であることが

¹ もっとも、大綱化以降、一般的に教養科目の必修単位数は20%程度減少しているのが通例の様である。（杉谷祐美子「日本における学士学位プログラムの現状」2005年。）

² 吉田文「教養教育と一般教育の矛盾と乖離：大綱化以降の学士課程カリキュラムの改革」『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—14』2006年、25頁。

コア（新潟大学でいえば01、02科目）であって、ここを疎かにして、情報科学教育に走るのとは本末転倒であるという事である。大学設置基準に引きつけて言えば、情報教育はまず、「総合的な判断力を培う」、スキル養成科目としての「情報リテラシー」科目であり、「幅広く深い教養」に位置づけられる、「情報（科）学教育」は二の次であるという事である。（必修でなければ問題は無いが。）

例えば、外国語科目の英語において、英語のRWLSスキルを無視し、言語学や英語学の理論的基礎をやさしく日本語で講義する、というのは考えられないであろう。そうした講義は外国語科目ではなく、旧設置基準でいう「一般教育科目」の「言語学入門」とか「英語学」といった科目にあたるものと考えべきであろう。（体育系科目も同様。）

しかし情報リテラシー教育に関しては、操作スキル教育への批判が強い。これは、現状の情報リテラシー教育が、単純な操作訓練に過ぎない事に大きな原因がある。それに対し、アカデミックリテラシーに基づく改善案を以下に示す。

3. アカデミックリテラシーにおける PC スキル

早稲田大学提唱で普及しつつあるアカデミックリテラシー³は、以下の内容から構成されている。

- (1) PC の扱い方
- (2) ネットワークの基礎理解
- (3) 情報倫理
- (4) 情報、文献検索
- (5) データ分析 [統計処理]
- (6) 論文作成
- (7) プレゼンテーション
- (8) Web 発信

以上の内容からも明らかなように、これらは、従来「情報リテラシー」と言われてきたものを、「大学における学習、研究」という目標から見直したものであり、操作技能から再構成すると、以下の様になる。（：の右は、上記アカデミックリテラシーの内容。）

- (a) OS の利用：(1)、(2)
- (b) Web ブラウザ：(4)
- (c) ワープロ：(6)
- (d) 表計算 [統計ソフト]：(5)

³ 「2009年度早稲田大学メディアネットワークセンター『アカデミックリテラシー』テキスト」
(<http://www.decode.waseda.ac.jp/ronbun/>)

もっとも、学部レベルに限定して言うとするれば、「スタディスキルズ」といった方が適切だと思われる。（加賀山茂、松浦好治編著『法情報学 - ネットワーク時代の法学入門（第2版補訂版）』2006年、125 - 133頁、参照。）

- (e) プレゼン：(7)
- (f) HTML：(8)
- (g) 情報倫理：(3)

操作技能から見ればこれらは従来の情報リテラシー教育と大差ない。しかし、リテラシーの習得そのものが目標なのではなく、「大学における、学習、研究の為の情報リテラシーの育成」が目標となっており、リテラシーはあくまでその手段となっていることが重要である。すなわち、同じ操作技能訓練を行うにしても、マテリアルが大学教育に標準を置いた高度なものでなければならぬという事である。これを実現する手段として、一つは早稲田大学の様に学部共通を前提としながらマテリアルを高度化する方策があるが、学部学科や教職課程などの専門の内容にシフトしたマテリアルを取扱うという方策もある⁴。大阪大学の情報リテラシー科目である「情報活用基礎」は後者の傾向が強い。

この点で言えば、例えば単なる英語ネイティブが、そのまま良い英語教師になれない（名選手必ずしも名コーチならず）のと同様、技能を教えるにしても、各学部学科の専門内容への一定程度の理解が、教える側に必要であって、外国語教育と同じく、使えるから教えられるといったものではない事は重要であろう。

4. 具体的提言

以上の様に、PCスキルは学士課程におけるアカデミックリテラシー（スタディスキルズ）として必須のものであって、これを有しない学生に対しては、早い時期で訓練すべき内容である。

もっとも2003年以降、高校でも「情報」科が始まり、学生によっては技能教育が不要という場合もあるであろう。

以上の様な現状から、以下を提言する。

- (1) 大学で開講する場合
 - ・アカデミックリテラシーを意識したPC技能教育を施す。
 - ・PC技能教育は、卒業単位として認めてもいいが、必修は外す。
- (2) 大学では開講しない場合
 - ・PC技能教育は業者に任せ、「情報教育」という科目分野は廃止する（私立D大学方式）。
 - ・PC技能テストを業者に行わせ、科目によっては、これに合格しなければ履修を認めない事を明確に示す（私立A大学方式）。

⁴ そうした趣旨から筆者が編集した教科書として、教職課程を意識したものはあるが、『教職基礎・情報機器の操作』2005年、コロナ社、がある。

おわりに

大阪大学の共通教育「情報教育カリキュラム委員」等に携わってきたが、所謂「情報リテラシー」科目がほとんどの学部で必修なのは良くないと思っている。その理由は以下の通りである。

- (1) 既に情報リテラシーを習得している学生は、他の科目を履修した方が、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培」かえる。
- (2) リメディアルとして必要な学生には、学習チャンスを与えさえすれば良いのであって、単位を発行する必要はない。

資料1 「新潟大学の分野・水準表示法」

全国のほとんどの大学の授業科目は、教養科目と専門科目という二つの区分に分かれていて、……。新潟大学では、この垣根を取り払い、他の学部が専門とする授業科目でも、自由に選択し履修することが出来る「全学科目」という統一的な区分にまとめました。……。

水準コードは10の位、1の位それぞれに意味を持っています。10の位はその授業科目を聴講できる対象者、1の位は授業科目の学問水準をそれぞれ示しており、コードの意味は下表のようになります。

10の位の数字	
0	全学の学生を受け入れることが可能な科目
1	当該学部（学科）の学生に限られる科目
2	教員免許など資格に関わる科目

1の位の数字	
1	大学学習法など、大学での学習を円滑にするためのもの
2	高等学校との接続を意識した水準（リメディアル）
3	通常の大学の基礎的水準
4	専門の中核的水準
5	発展的内容の科目で大学院との接続水準

幅広い領域をさまざまな視点で。全学共通教育

共通教育系科目	教養教育科目	<p>自然や文化に対する科学的かつ学際的な視野を修得し、さらに現代社会に存するさまざまな課題を解決していく力をつけるための科目群。大阪大学の教育理念である「教養」「デザイン力（構想力）」「国際性」を養成する目的で、4つの科目群より構成されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎基礎教養科目 ●文・理系の専門各分野における基礎的な内容が「入門」「基礎的教養」あるいは「思考力」の養成という視点からわかりやすく講義され、各領域における基礎的な知識とその研究の意義を学びます。 ◎現代教養科目 ●人権、コミュニケーション、少年犯罪、安全、環境など現代社会が抱えるさまざまな問題が多彩な専門領域の研究者から多角的に議論され、現代の複雑かつ困難な状況について科学的に考えるきっかけが提供されます。 現代を生き将来を担う！ ◎国際教養科目 ●国際化時代に対応しうる会話、教養、マナーなどの能力あるいは知性を磨く科目。言語文化（言語の成り立ちとその歴史）、日本国論（近代・現代史と世界の中の日本）などの内容も含まれます。 地域に生き世界に伸びる！ ◎先端教養科目 ●大阪大学が擁する専門各分野の最先端の研究がわかりやすく紹介され、研究の魅力、醍醐味が実感できます。世界で活躍する大阪大学の教員以外の人々から学べる講義もあります。
	言語・情報教育科目	<p>国際化と情報化に対応するコミュニケーション能力を身につけるための科目群。実践的な語学力を鍛える外国語教育科目とコンピューターの基礎能力を習得する情報処理教育科目があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎外国語教育科目 <ul style="list-style-type: none"> 第1外国語 ●授業科目…英語（大学生にふさわしい英文理解能力養成・英文作成表現能力養成・オーラルコミュニケーション能力養成・多読、速読による英文理解力養成） 第2外国語 ●授業科目…ドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、中国語、朝鮮語 選択外国語 ●授業科目…英語、ギリシャ語、ラテン語等 特別外国語 ●授業科目…スワヒリ語、モンゴル語、ビルマ語、トルコ語等多数 ◎情報処理教育科目 ●授業科目…情報活用基礎、コンピュータのしくみ、情報科学入門、情報社会と倫理、計算機シミュレーション入門、情報探索入門
	基礎セミナー	<p>担当教員が設定したテーマに基づいて少人数で学習する科目。自分で調べた内容を発表し討論します。研究のための基本的な態度を習得することになり、学習意欲と創造性を喚起します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●臨床哲学セミナー、人文地理学セミナー、脳と行動、こどもの現在、ナノサイエンスの世界、楽器を作るー音の科学入門ー、出産を考える、生命とくすり、宇宙への旅：材料の役割、飛行機とロケットの技術、建築・町を見る、量子力学の不思議な世界等多数
	健康・スポーツ教育科目	<p>自発的に健康管理を行うこと、スポーツに取り組む実践的な能力を養うこと、そのための科学的知識を深めること。それらを目的とした科目です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●授業科目…スポーツ実習A、スポーツ科学、健康科学実習A、健康科学、スポーツ実習B
	専門教育系科目	専門基礎教育科目
専門教育科目		<p>専門領域に直結する科目。</p>